

平城宮第265次調査(東区朝堂院南門) 現地説明会資料

1996年3月30日
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

1 はじめに

平城宮第265次調査は、平城宮に二つある朝堂院のうち、東の朝堂院(いわゆる第2次朝堂院)の南門とその東西に延びる朝堂院の南を限る施設の検出を主な目的としたものです。調査面積は約2030㎡で、1月9日に調査を開始し、現在も継続中です。

これまでの発掘調査によって、東の朝堂院には全部で12の朝堂があったことが明らかになっています。奈良時代の初めに建てられた掘立柱の朝堂には後に庇が付設され、さらに745(天平17)年の平城京への遷都後に礎石建物に建て替えられたらしいこともわかってきています。平城宮の政治や儀式的中心建物である大極殿は、740(天平12)年に恭仁宮に移建されるまで中央の朝堂院の北側にあり、平城京への遷都後に初めて東の朝堂院の掘立柱建物の正殿が礎石建ちの大極殿に建て替えられたのですが、その南に12棟あった建物は、奈良時代を通じて一貫して朝堂としての働きを保ち続けたと考えられています。その南門やそれに取り付く区画施設がどのような建物であり、いかなる変遷をたどるのかを解明することは、東の朝堂院地区の性格を考える上で非常に重要な課題であるといえます。

2 検出した遺構

これまでに確認した遺構は、朝堂院南門(掘立柱の門を同位置同規模で礎石建ちの門に建て替えています)とその東西に延びる朝堂院の南を限る施設(掘立柱塀を築地塀に造り替えています)、及びこれらに伴う雨落溝、門の外側南東の朝集殿院内に建つ基壇建物1棟、門前面の南北柱列2条、門前面の東西溝1条、古墳時代の溝1条などです。これらのうち、奈良時代の遺構は大きく上層と下層の2時期に分けられます。

〈下層の遺構〉

門1 平城宮造営の当初に建てられた奈良時代前半の朝堂院南門です。桁行5間、梁間2間の掘立柱建物で、基壇を伴います。柱間は桁行が両端の間が10尺(約3m)、中央の3間がそれぞれ15尺(約4.5m)、梁間はいずれも12尺(約3.6m)、

つまり東西約19.5m、南北約7.2mで、建築面積は約140㎡です。柱穴は18カ所あることになりませんが、門1を門7に建て替えた時に新たに積んだ基壇の土が残っているところでは門1の柱穴は見えないので、現段階では部分的なものも含めて11カ所の柱穴を確認しています。また、穴を掘って柱を建てた後に土を積んで基壇を造っているため、門1そのものの基壇の土が残っているところでは、柱を抜き取るための穴(抜取り穴)は見えますが、柱を建てるための穴(掘形)は見えません。

なお、基壇の出がどれだけあったかはわかりませんが、門7よりは一回り小さかった可能性があります。また、門の基壇の外装についてもわかりません。

掘立柱塀2・3 門1の時期の朝堂院の南を限る塀です。緩い傾斜面に丁寧な版築を行って平らな面を設けてから塀を造っています。築地塀8・9の下に隠れているため、部分的に確認できたに留まりますが、門1の妻柱から外側へ順に12.5尺・12.5尺・15尺の間隔、これより外側は10尺の間隔で柱を立てているようです。柱間15尺の部分には脇門が開いていた可能性もあります。

雨落溝4・5 掘立柱塀2・3の北側の雨落溝です。幅約1m、深さ約25cmあります。門の位置で北へ折れますが、門の北側をどうめぐっていたかは未確認です。なお、掘立柱塀2・3の南側の雨落溝は削平されて残っていませんでした。

東西溝6 朝堂院南門の南を東西に横切る素掘りの溝で、幅約1.5m、深さが現状で約60cmあります。若干の瓦と須恵器、及び木屑が出土しました。方位にきちんと乗ること、溝の壁がほぼ垂直に立ち上がり崩れたような痕跡が見られないこと、整地土で埋められていることなどから考えて、平城宮造営当初に掘られて、短時間のうちに埋め戻されたようです。何らかの区画溝または造営に伴う排水溝と考えられます。

〈上層の遺構〉

門7 門1と同じ位置で礎石建ちの門に建て替えた奈良時代後半の朝堂院南門です。門1の柱を抜き取った後、その抜取り穴を丁寧に埋め、さらに土を積んで基壇を造って建てられています。新たに積んだ門7の基壇はかなり削り取られていて、礎石を据え付けるために掘った穴(礎石据え付け穴)の底がかろうじて残る程度で、18カ所のうち8カ所を確認できたに留まります。礎石は全て抜き取られ、わずかに一つだけが基壇上に掘られた穴に落とし込まれて残っています。

門7の北側には、凝灰岩を含む溝状の部分が残っています。これは門基壇の地覆石とその外側に設けられた雨落溝の底石や側石を抜き取った痕跡と考えられます。門の外装は凝灰岩による壇正積み基壇で、雨落溝も凝灰岩を用いたものであ

ったと考えられます。基壇の出は、南北・東西とも6尺(約1.8m)になります。

この門北側の溝は、西から二つめの柱の位置でカギの手に曲がって約75cm北に張り出します。これは階段の出があったためと考えられるもので、北側では中央の3間に3段ほどの階段があったようです。門の南側では階段の痕跡が残っていませんが、北側と同じ中央の3間に階段があったとみられ、門の北と南の段差(約80cm)から、北側の倍の6段程度と考えてよさそうです。

門の東西にも凝灰岩を含む溝状の部分があり、門基壇の地覆石の痕跡と考えられますが、この溝は途中で途切れます。門の基壇を造った後、築地塀8・9の取り付く部分をコの字型にカットして築地塀8・9を取り付けているようです。なお、門東面の築地塀8の南側には門基壇の地覆石が1個ほぼ原位置を保って残っています。

門7には南と北に掘立柱の土庇の柱穴が見つっています。このうち北庇は門の北側柱から17尺(約5.1m)の位置にあります。礎石据え付け穴がわずかに残るだけなのに門7の身舎の柱間が確定できるのは、この庇の柱間がわかるからです。なお、基壇東西両端の北延長上の北庇の位置にも同様の柱穴があります。庇の軒先の垂れ下がりを防ぐための支柱と考えられます。

門7の基壇と北庇の間には拳大の石が敷き詰めてありました。整地土上に溝を掘って砂質の土を入れた後に石を敷いて溝を埋めており、基壇北側の雨水を集める暗渠として機能したと思われます。北庇の柱を立てた後に石を敷き詰めていて、庇の建設と石敷とは一連の仕事ですが、北庇は臨時の施設ではないようですが、後から付設された可能性はあります。

これに対し南庇は様子が異なります。南庇には2時期あって門の南側柱から15尺(約4.5m) 離れる古いものと、18尺(約5.4m) 離れる新しいものがあります。これらはよく似た柱穴であり、いずれも門7に伴うものと思われるが、2時期あることから考えて儀式に伴って臨時に付設された庇である可能性もあります(5頁の復原図は南庇の付設された状態で描いています)。

築地塀8・9 門7の時期の朝堂院の南を限る塀です。掘立柱塀2・3を取り壊した後にさらに土を積んで造っていますが、掘立柱塀2・3に比べると積み方は粗く、かなり粗雑な仕事をしています。築地塀8・9の積み土は厚いところでも約20cmが残るだけです。築地の基底幅は7尺(約2.1m)、基底部北端には瓦を並べていたようです。築地南側には約90cm幅の犬走りが認められ、門基壇脇の犬走り上に掘り込まれた土坑には、凝灰岩の部材(用途未詳)が投棄されていました。**雨落溝1.0・1.1** 築地塀8・9の北側の雨落溝です。幅約1.5m、深さ約25cmあ

ります。溝内には大量の瓦が落ちており、溝の上部は築地塀の崩壊土が覆っていました。門の位置で北へ折れ、門の北側の雨落溝に接続するものと考えられます。また、埋土には多数の塀が含まれており、築地塀の犬走りに敷いていた可能性があります。なお、築地塀8・9の南側の雨落溝も削平されて残っていませんでした。

基壇建物1.2 朝堂院南門の南東の朝集殿院内で検出した建物です。基壇西端が門7の基壇東端から20尺(約6m)、基壇北端が門7基壇南端にそろり位置にあります。基壇の規模は東西約9.4m、南北約7mあります。

北側で凝灰岩の地覆石がよく残っています。長さ約60cm幅約25cmの地覆石が東西方向に本来16個据えられていたようで、このうち9個が現存しています。上面の基壇側にはあたる部分には、羽目石を受ける欠き込みがあります。地覆石の外側には幅約50cmの雨落溝がめぐります。

基壇上には礎石建ちの建物があったと考えられます。削平されていてその痕跡はほとんど残っていませんが、桁行3間、梁間2間、柱間がいずれも8尺等間、軒の出4尺程度の建物が推定できます。

遺構としては残っていませんでしたが、朝堂院南門をはさんだ対称の位置にも同じ規模の建物の存在が想定できます。凝灰岩の破片が認められるのはその痕跡と考えられます。

柱列1.3・1.4 門の両妻の南のやや外側に、5尺の間隔で3つずつ並ぶ南北方向の柱列です。儀式用の旗竿を立てた穴でしょうか。『続日本紀』天平17年6月庚子条には平城還都に伴って宮門に大楯を樹てたという記事があり、あるいはこれと関係するかも知れません。

〈奈良時代より前の遺構〉

斜行溝1.5 古墳時代の溝で、南岸を検出しました。北岸は基壇建物12の下にあると考えられます。溝幅2m以上深さ60cm以上あります。遺物からみて1968年に東朝集殿の調査(第48次調査)で確認した溝と一連のものと考えられます。

3 出土した遺物

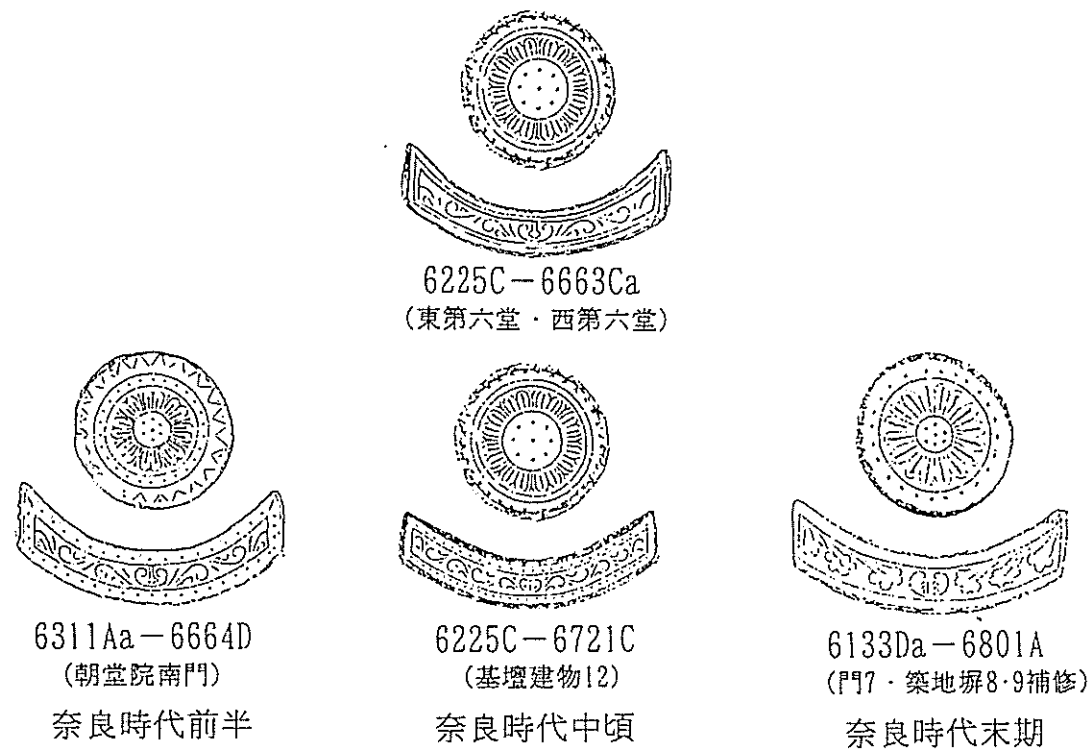
大量の瓦と少量の土器が出土しています。

瓦は遺構上面を覆う遺物包含層、及び朝堂院南限の築地塀8・9の北側の雨落溝10・11からまとまって見つかりました。年代の推定の重要な資料となる軒丸瓦や軒平瓦もたくさん出土していて、現在までに軒丸瓦約90点、軒平瓦約75点を確認しています。

最も多くを占めるのは、平城宮軒瓦編年Ⅱ期（養老5年～天平17年、721～745）の6311型式の軒丸瓦と6664型式の軒平瓦です。特に雨落溝10・11や門1・門7の周辺からまとまって出土しています。この組み合わせの軒瓦は、内裏のⅡ期（聖武天皇の内裏。大極殿・朝堂の建て替え以前）の瓦とされるもので、これまでに朝堂院域でまとまって出土したのは東門周辺（1989年の第203次調査）だけです。朝堂院域で主体を占めるのは、平城宮軒瓦編年Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間、745～757）の6225型式の軒丸瓦と6663型式の軒平瓦で、礎石建ちの朝堂に葺かれていたと考えられます。ところが、今回の調査で6311-6664の軒瓦の組合せが南門や築地の周辺で多数見つかったによって、門を含めた朝堂院の周囲の区画施設とその内部の朝堂とで異なる軒瓦が葺かれていたことがほぼ明らかになりました。

次に多いのは、平城宮Ⅲ期の6225型式の軒丸瓦と6663型式の軒平瓦、及び6721型式の軒平瓦です。6225-6663型式は礎石建ち朝堂の軒瓦の組合せで、今回の調査でも北端で多数見つかり、東第六堂や西第六堂に葺かれていたものと考えられます。6225型式の軒丸瓦は基壇建物12の周囲からもまとまって出土していますが、基壇建物12の周囲から見つかる軒平瓦は6721型式のものが多く、基壇建物12は6225-6721型式の軒瓦の組合せで葺かれていたと考えられます。いずれにせよ、基壇建物12は、朝堂の建て替えと同時に新たに建設された可能性が高いといえます。

他に平城宮Ⅴ期（宝亀元年～延暦3年、770～784）の6133型式の軒丸瓦と6801型式の軒平瓦が築地塀の周囲から出土しています。奈良時代末の築地や門の補修に伴うものと考えられます。



道具瓦としては、鬼瓦や面戸瓦、東第六堂や西第六堂に葺かれていたと考えられる隅木蓋瓦が見つかりました。

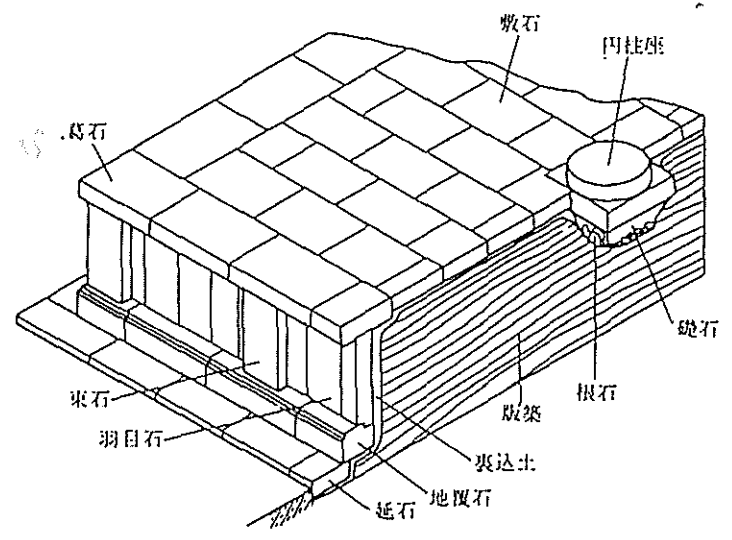
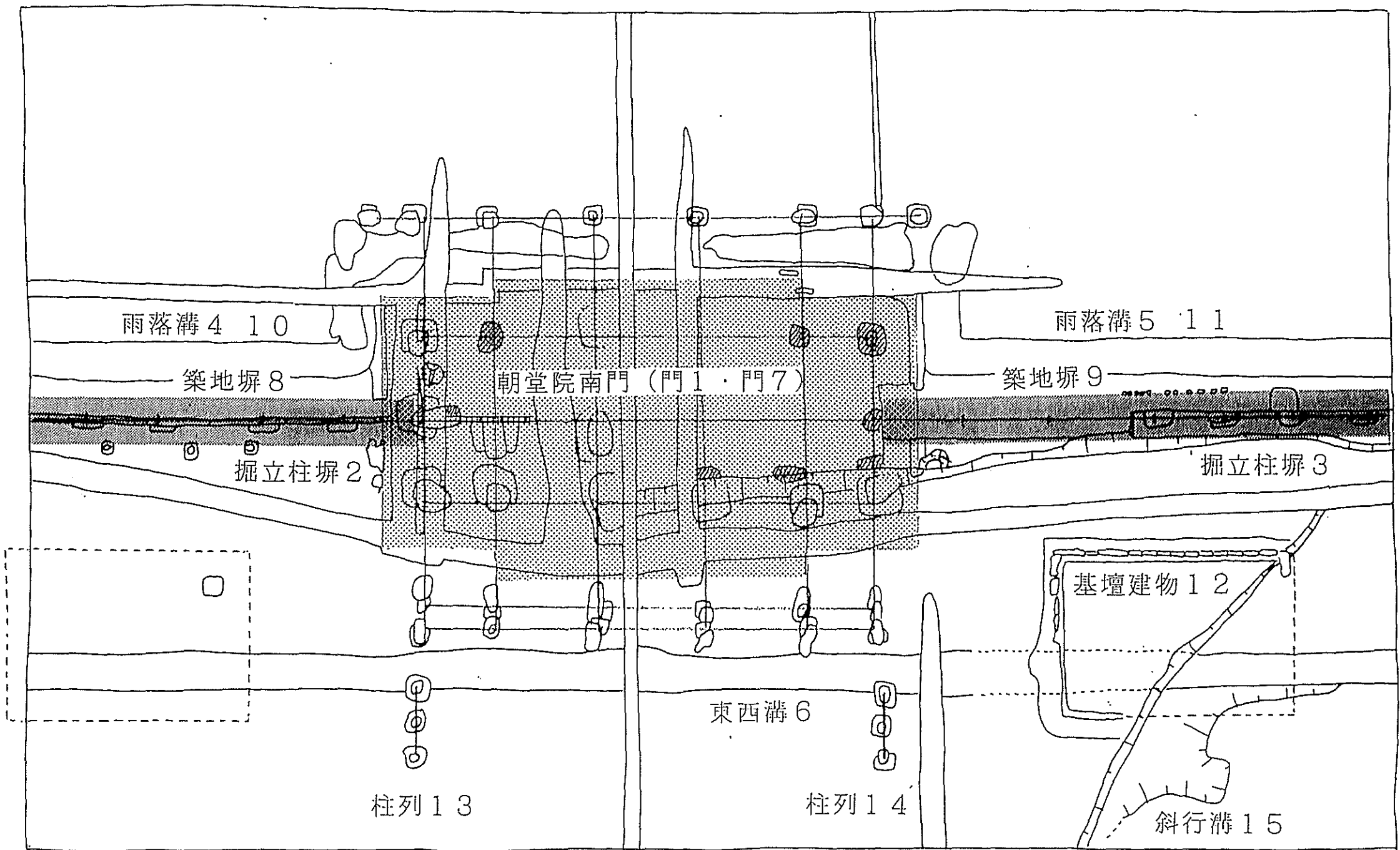
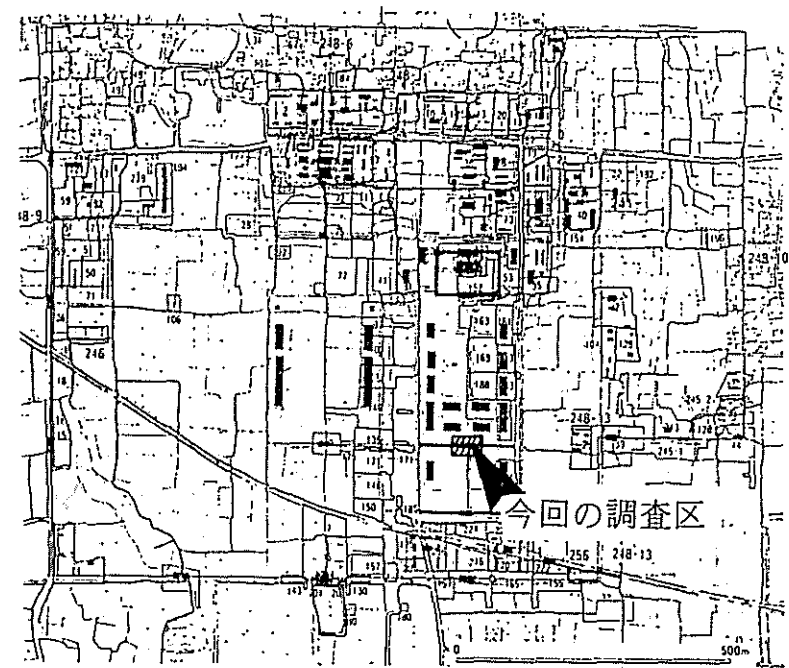
土器は、奈良時代のものとしては遺物包含層から出土した硯の破片数点などがあるだけですが、古墳時代の斜行溝15から土師器・埴輪が見つかりました。土師器は古墳時代中期前半（5世紀前半）のもので、東朝集殿下層の溝上層の土器群とほぼ同じ内容です。埴輪には4世紀代（須恵器出現直前）及び5世紀代の円筒埴輪、4世紀代の形象埴輪があります。この溝には木製遺物も含まれていません。なお、この溝を掘り込んでいる層よりさらに下の洪積世の層からは、国府型ナイフ形石器（約2万年前の旧石器）が見つかりました。

4 まとめ

今回の調査で現在までに得られた主な成果を、以下に整理しておきます。

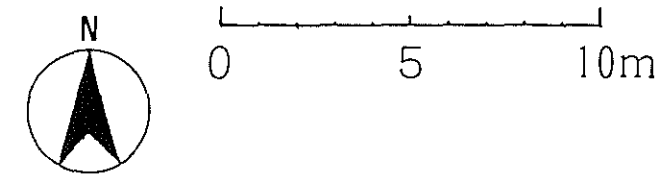
- ①南門の位置と規模が判明し、東の朝堂院の規模が確定しました。東の朝堂院の南限は、中央の朝堂院の南限にそろえられており、南北の長さが960小尺（800大尺）であることがわかりました。
- ②これまでに調査してきた東の朝堂院の朝堂と同じように、その南門も当初の掘立柱建物から礎石建物への建て替えがあること、また、これに伴って朝堂院の区画施設が掘立柱塀から築地塀に造り替えられていること、しかも南門の規模そのものは奈良時代を通じて同じであったことがわかりました。
- ③朝堂院の前面の左右に基壇建物の存在することが明らかになりました。これまで朝集殿院内には東西に朝集殿があるのみと考えられてきましたが、朝堂院南門と密接な関連をもつ建物が建てられていたことがわかりました。

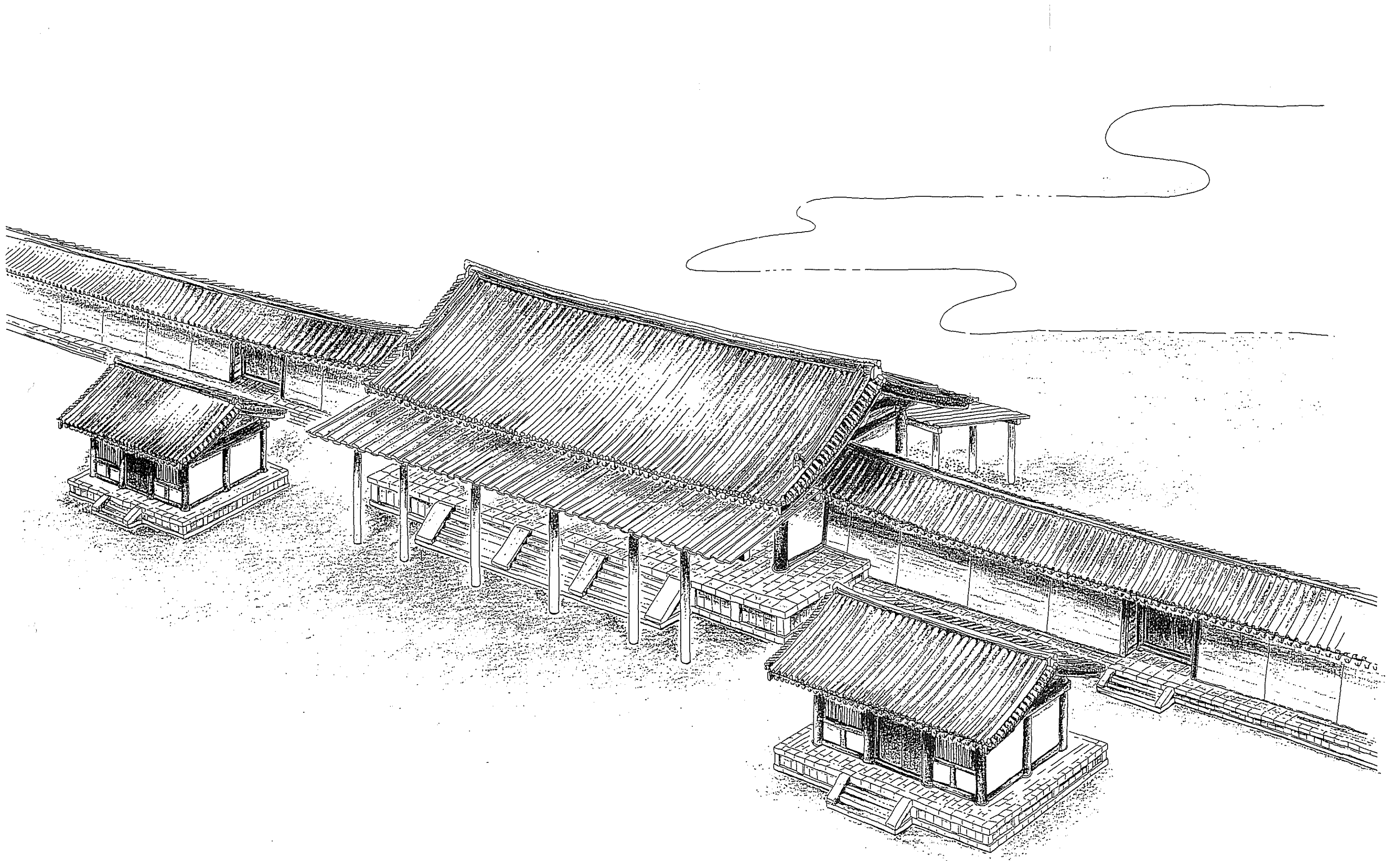
これらに関連して新たな課題も生まれました。同じ掘立柱建物から礎石建物への建て替えという変遷をたどるのですが、朝堂とその周囲の区画施設とでは葺かれていた瓦が違うことがわかりました。所用瓦の年代観が直ちに建設時期に結び付くのであれば、掘立柱塀・門から、築地塀・礎石建ちの門への建て替えが、平城遷都（745年）後の朝堂の掘立柱建物から礎石建物への建て替えに先行して養老（717年～724年）・神亀（724年～729年）頃に行われたことになり、東の朝堂院の整備が2段階に分けられる可能性を考慮する必要があります。しかし、ストックされていた軒瓦を使用して、朝堂とその周囲の区画施設に葺き分けたと考えることもできるので一概には決めがたく、今後大きな課題を残すことになりました。



『日本建築史図集』より

平城宮第265次調査(東区朝堂院南門)遺構配置図





奈良時代後半における平城宮東区朝堂院南門の推定復原図（作画：須崎陽子）